

事件2. 迷い犬『各国官吏并同従民往復留 外務課事務簿 明治7年』(県書 14 376-3)より

明治7年(1874)7月29日のこと、真鍮の首輪がついた赤毛の小型犬が油屋町の中村按太郎宅に駆け込み、そのまま居座ってしまいました。困った中村氏は県庁に届け出て、この犬は県庁で保護されることになりました。当時の日本では見慣れぬ洋犬で、首輪もついていたことから、外務課はこの犬を居留地民の飼い犬と判断しました。そこで8月1日、「心当たりのある者は10日以内に申し出るよう」各領事館へ通知が出



〔長崎歴史文化博物館収蔵「倉場富三郎写真帳」より〕

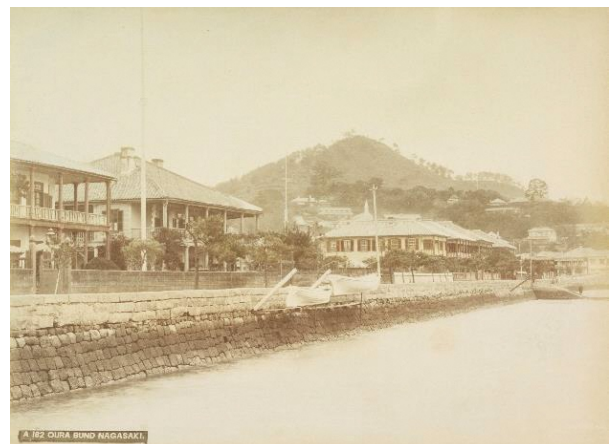
されました。実はこれと同じような事案が樺島町でも同年6月2日にも発生しており、その対応として「通達より10日は県庁で保護」というルールもすでに定まっていた。



当時、居留地に住む外国人たちは、自国から犬を連れてきてペットとして飼っていました。そのころ居留地で撮られた写真のなかにも、愛犬と一緒に写っているものを多く見ることができます。現在のグラバー園内には飼い犬の墓と思われる墓石があり、居留地民にとって犬(ペット)は慣れない外国での生活のなかでの癒しという大事な存在だったことが伺えます。また、残された写真から飼われていたのはポインターやヨークシャテリアなど、そのころの日本では珍しかった犬種だったことが見てとれます。これらの犬は居留地内ではほとんど放し飼い状態だったため、時折飼い主の目を盗んで居留地を抜け出し市中を徘徊していたようです。こうして市中で発見された洋犬は「迷犬」として保護され、その都度各国の領事へ通知されていたのでした。

事件3. 迷いやぎ『各国官吏連名往復 長崎県外務課 明治3年』(県書 14 28-7)より

明治3年(1870)9月のこと、2疋のヤギが居留地に隣接する戸町村鍋冠山(なべかんむりやま)の周辺で出沒し、近傍の畑を荒らしまわり百姓たちが困っているとの訴えがありました。この訴えに対し、外務局は居留地の各岡士(領事)に対し、「貴国の居留地民が飼っているヤギが逃げ出すことがあっているならば、この1週間のうちに捕えるように」との通達を出しています。さらに期日をすぎた場合、県庁のほうで「勝手ニ狩取」をおこなうと記されています。残念ながら、この件についてもその後の記録は無く、2疋のヤギが飼い主のところへ戻ったのか、それとも狩り取られてしまったのか不明です。



〔大浦居留地(現在の大浦海岸通り 背後の山が鍋冠山) 〕

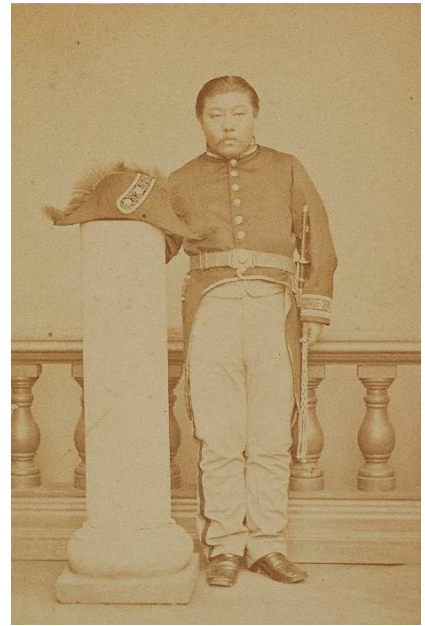
多忙をきわめた横山貞秀『諸願諸届綴込 外国局 明治2年1月』（県書14 265-3）より

横山又之丞貞秀（1833-90）は長崎において長年オランダ通詞を勤めた横山家（本家）の11代にあたります。幕末までオランダ通詞であった横山貞秀はその語学の才能を認められ、明治維新後も新政府に登用されました。長崎県大属、長崎県小参事、長崎県参事などを歴任し、初代長崎税関長を務めたのち、大蔵省の官僚としても活躍します。台湾出兵の際には西郷従道のもと「藩地事務支局長」として現地に赴き清朝との交渉にあたり、実務官僚としての外交手腕を発揮しました。その勤勉実直な仕事ぶりから作家司馬遼太郎は小説『翔ぶが如く』のなかで彼のことを“筋のとおった官員”と紹介しています。

三菱郵船会社監督を務め大隈重信にも近かったとされる横山は、明治14年の政変（1881年）に連座するかたちで政府を退くこととなりますが、その後は東京海上保険会社の取締役役に就いています。

その輝かしいキャリアの出発点となった長崎で彼は各国領事との交渉や連絡など明治初期の居留地経営に大きな役割を果たしており、多忙をきわめていたと考えられます。

その中で、今回当時の横山の状況がうかがえる資料が発見されました。『諸願諸届綴込 外国局 明治2年1月』のなかに、横山が自ら書いて提出したと思われる明治2年（1868）11月25日付けの“産穢（さんえ）”伺いが綴られていたのです。江戸時代、子どもの出産を終えた父親は7日間外出・出仕を控えるという習慣がありましたが（母親は35日）、明治維新からまだ間もないこの時代にもこの習慣が続いており、横山もこの習慣に従ったものと思われます。しかしこの伺いには『御用多くの折柄に付き引入に及



〔横山貞秀（上野彦馬撮影）明治6年〕

ばず候事』という付紙がなされており、横山の産穢は認められませんでした。この当時横山は「権大属外国管事役所掛兼裁判所辨務」という要職に就いており、1週間でも彼が不在になると、業務に支障をきたしかねないという配慮からだったのでしょう。後に中央の官吏に抜擢されるほどだった横山の優秀さを示すエピソードです。

余談になりますが、横山が書く文字は非常に特徴的で、その筆跡を手がかりにすると横山貞秀が自ら書いたと思われる書簡・報告書類などを比較的簡単に見つけることができます（今回ご紹介した「事件1」の文書も横山が自ら書いたものです）。これらを丁寧に調査すると横山の長崎時代におこなった仕事の詳細を明らかにすることも不可能ではないと思いますが、これはまたの機会に譲ることとします。

